

史跡恵美須ヶ鼻造船所跡

世界遺産 明治日本の産業革命遺産-製鉄・製鋼、造船、石炭産業-

令和2年度 発掘調査 現地見学会資料

1 はじめに

史跡恵美須ヶ鼻造船所跡は、平成21～24年度にかけて試掘調査を実施し、その成果から、造船所跡の遺構が遺存されていることを確認しました。このことにより、平成25年10月17日に国指定史跡となり、平成27年7月8日には世界遺産の構成資産の一つに登録されました。

過去の調査は、造船場の他、綱製作木屋、切組木屋、蒸気製作木屋、絵図木屋の発掘調査を行い、本年度の調査では、海岸の石垣護岸、招聘船大工住居、木挽木屋、綱製作木屋とその他の施設の確認を調査の目的として行ってきました。

本日はその成果を皆様に公開し、史跡恵美須ヶ鼻造船所跡についてよりご理解いただければ幸いです。



第1図 調査地位置図

2 調査の概要

期間 4月下旬～11月末(予定)
位置 萩市大字椿東字小畑浦(第1図・図版1) T(トレンチ)1～5
面積 318㎡(T1:180㎡、T2:36㎡、T3:10㎡、T4:60㎡、T5:32㎡)

目的 各遺構の確認調査
T1 招聘船大工住居、木挽木屋、海岸の石垣護岸
T2・3 綱製作木屋ほか
T4 絵図にない施設
T5 丙辰丸または庚申丸の造船場進口水口

3 調査の成果

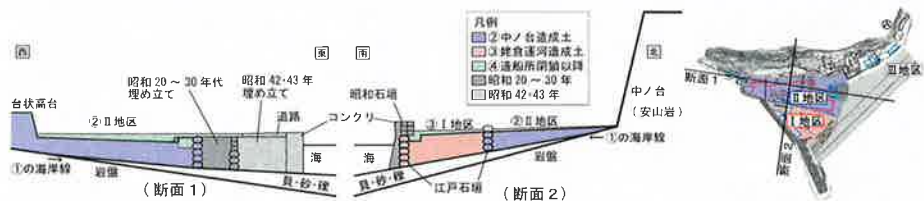
(1) 基本層序(土地の成り立ち)

基本層序は、概ね4時期から構成されます(第2図、図版1)。

①下屋敷以前の時期 巨石群と貝層を確認し、下屋敷以前の自然海岸(礫浜)と推測されます。また、昨年の調査では貝層上層の礫層から古墳時代の須恵器と土師器が出土しています。

②榎本伊豆下屋敷とその前後の時期 下屋敷以前に中ノ台を削平した土で造成し、巨礫で海岸の石垣を構築しています(II地区)。下屋敷の建築時期は不明ですが、恵美須社の鳥居の文政ヒ(1824)年銘はその手がかりになると考えられます。

③造船所の時期 安政元～2(1854～1855)年に姥倉運河を開削した排土(砂礫)で造成された土地で、防波堤はこのときに築られました(I地区)。その後、造船所が安政3(1856)年に建設され、



第2図 基本層序模式図

安政3～4(1856～1857)年の丙辰丸建造時期と安政6～万延元(1859～1860)年の庚申丸建造時期の約7年間使用されています。

④民間地の時期 造船所閉鎖(1860年)以降で、明治20年代の土地台帳から民間地であることが確認でき、昭和初期には個人住宅、魚加工場、その後、世界遺産登録まで個人住宅でした。

4 まとめ

以上のとおり、本年度調査では、造船所当時の石垣護岸を確認し、はじめて絵図のような造船所範囲の一部を明らかにすることができました。また、絵図にない台状平場が人工的に造成された土地であることが分かりました。その他にも多くの

(2) 検出遺構(裏面・図版1)

本年度(R2)調査では、T1で2時期の石垣護岸と木挽木屋関連の木材陸揚場、T2・3で綱製作木屋と関連施設、T4で台状平場、T5で造船場進口水口と石垣護岸を確認しました。

図版1では昨年度(R1)調査成果も合わせて掲載しました。なお、本年度調査トレンチはR2T1、昨年度調査トレンチはR1T1と表記しました。

結果がありましたが、多くの問題点も残りました。①造船場進口水口の全容と構造。②綱製作木屋の構造。③台状平場の役割。④各施設の位置。整備に伴う遺構確認調査は来年度で最後になります。今後はこれまでの調査成果を報告書にまとめ、整備に反映していきたいと考えています。

参考 年表と船の種類

年	出来事
天保11(1840)年	村田清風の軍制改革 山田亦助・周布政之助にか合同。姥倉運河開削開始。
嘉永5(1852)年	桂小五郎、江ノ橋長兵衛(剣術修業)、斎藤弥九郎と師匠関係。大船建造禁止令を解除。ベリイ提督率いるアメリカ東インド艦隊4隻浦賀来航。
嘉永6(1853)年	桂小五郎、斎藤弥九郎の仲介で江戸船場(伊豆代官江川太郎左衛門英龍)に入塾し、洋式絵図を学ぶ。
嘉永7・安政元(1854)年	桂小五郎、浦賀船奉行与力中島三郎助に艦艇建造技術を学ぶ。安政地書載。ロシア使節フチャーチン率いる軍艦ディアナ号大塚伊豆国君沢都戸田村でKheda(ヘダ)号を建造。
安政2(1855)年	今浦新渡止(Ⅰ地区)・姥倉運河完成。桂小五郎、船大工藤井勝之進を中島三郎助に紹介。桂小五郎、中島三郎助から戸田村へ行くこと、長川藩も君沢形本造帆船を建造することを教授。船大工尾崎小右衛門、スクナー一船建造に関わった者を探すため、戸田村と江戸周辺を視察。泉涌主(若年寄、海防掛)本多越中守忠徳の家邸であり、斎藤弥九郎と親しい船大工高崎伝蔵と戸田村船大工藤井勝之に会い、高崎伝蔵(棟梁)と戸田村船大工の渡辺金右衛門(造船術)・堤勇吉(造船術)・又三郎(綱・木油製造と運用術)の名を相傳し、高崎伝蔵、小畑浦に恵美須ヶ鼻造船所建設。バツテラ船建造。
安政3(1856)年	丙辰丸の進水式。コットル船建造。丙辰丸、竣工し完成。海上毛刺帆の規模の下、近海試運転。恵美須ヶ鼻造船所閉鎖。
安政4(1857)年	恵美須ヶ鼻造船所再建と庚申丸建造。幕府、長崎海軍伝習所(オランダ人から教授)を建設。第1次長崎海軍伝習生(中島三郎助・勝海舟・榎本武揚・戸田村の上田寅吉・鈴木七助、萩藩の松島剛蔵(榎取孝彦兄)・藤井勝之進ほか。第1次長崎海軍伝習生船番。周布政之助の軍制改革。洋式軍艦の整備。山田亦助、軍制改革の総責任者に就任。2隻目の艦船建造を計画。山田亦助、恵美須ヶ鼻造船所を再建。丙辰丸の余材や残材等を整理し、製造船屋を修築。第2次長崎海軍伝習生を派遣。尾崎小右衛門、再度軍艦製造御用掛りに就任。藤井勝之進、長崎海軍伝習所の仲間(福岡藩船大工・本島次郎左衛門ほか4・5名、長崎の船大工棟梁駒次郎と弟子益子)を招聘。
安政5(1858)年	幕府、長崎海軍伝習所閉鎖。直伝習生勝海舟、恵美須ヶ鼻造船所に勤務。山田亦助、軍艦建造準備状況を報告。絵図木屋3箇所建設ほか。庚申丸建造開始。
安政6(1859)年	庚申丸進水式。庚申丸、竣工し完成。恵美須ヶ鼻造船所閉鎖。
万延元(1860)年	恵美須ヶ鼻造船所閉鎖。

3 船の種類

バツテラ船
ポルトガル語、小船(ボート)のこと。
1本マスト2段縦帆の本造帆船。全長約8m。
恵美須ヶ鼻造船所で最初に建造した本造帆船。

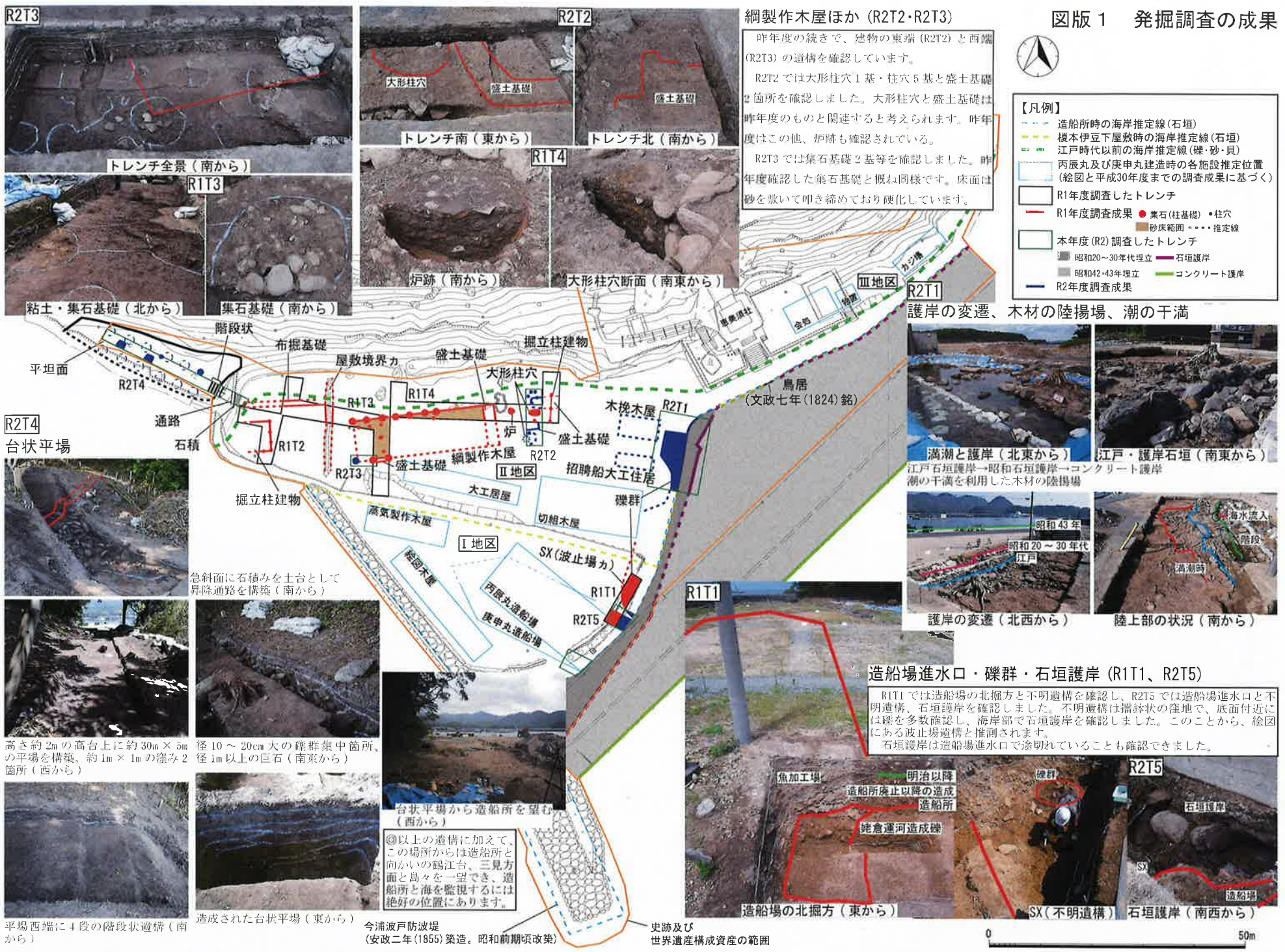
コットル(カッター)船
大形船に搭載される手漕ぎの小船(ボート)。
全長約6m。丙辰丸の余材で建造し、丙辰丸に搭載したと推測される船。

スクナー(スクーナー)船
2本マスト、2本と帆帆。
Kheda(ヘダ)号(本造帆船、全長24m)を伊豆国君沢都戸田村で建造。戸田村の船大工7名(渡辺金右衛門・堤勇吉ほか)がロシア人指導の下、洋式帆船を建造。
幕府、君沢形と命名。
丙辰丸(全長約24m)、萩藩で最初に建造した洋式本造帆船。桂小五郎と尾崎小右衛門が尽力。練習船、輸送船、軍艦として活躍。

バーク船
3本マスト、前2本が横帆、最後尾1本が縦帆。
庚申丸(全長約44m)。
萩藩が2番目に建造した洋式本造帆船。山田亦助・尾崎小右衛門と藤井勝之進ほかの長崎海軍伝習生が尽力。
安政5(1858)年、藤井勝之進、オランダ海軍士官に艦船設計図を提出。新艦模型に自作の設計図とオランダ海軍士官の意見書を含め、山田亦助に提出。練習船、軍艦として活躍。

トップスルスクーナー船
みらいへ。3本マスト、全長約52m。
1993年、大阪市が全国初の事業として一般市民のために「みらいへ」建造。
2000年、日本の帆船として初めて東回りヨーロッパ経由の世界一周航海「ワールドセイル2000」に成功。
2011年、大阪市が個人に売却。
2014年、船名を「みらいへ」に改名。神戸港を母港に体験航海事業を再開。
(海王丸ハーク日本海交差センター『世界の帆船復元展』)





網製作木屋ほか (R2T2・R2T3)

昨年度の続きで、建物の東端 (R2T2) と西端 (R2T3) の遺構を確認しています。

R2T2 では大形柱穴1基・柱穴5基と盛土基礎2箇所を確認しました。大形柱穴と盛土基礎は昨年度のものと同様と考えられます。昨年度は、炉跡も確認されています。

R2T3 では集石基礎と基等を確認しました。昨年度確認した集石基礎と概ね同様です。床面は砂を敷いて叩き締めており硬化しています。



- 【凡例】**
- 造船所時の海岸推定線(石垣)
 - 榎本伊豆下屋敷時の海岸推定線(石垣)
 - 江戸時代以前の海岸推定線(礫・砂・貝)
 - 丙辰丸及び庚申丸建造時の各施設推定位置 (絵図と平成30年度までの調査成果に基づく)
 - R1年度調査したトレンチ
 - R1年度調査成果 ● 集石(柱基礎) ● 柱穴 ● 砂床範囲 ● 推定線
 - 本年度(R2)調査したトレンチ
 - 昭和20~30年代埋立 ■ 石垣護岸
 - 昭和42・43年埋立 ■ コンクリート護岸
 - R2年度調査成果

護岸の変遷、木材の陸揚場、潮の干満



造船場進水口・礫群・石垣護岸 (R1T1、R2T5)

R1T1では造船場の北掘方と不明遺構を確認し、R2T5では造船場進水口と不明遺構、石垣護岸を確認しました。不明遺構は扇状地の窪地で、底面付近には礫を多数確認し、海岸部で石垣護岸を確認しました。このことから、絵図にある波止場遺構と推測されます。

石垣護岸は造船場進水口で途切れていることも確認できました。



R2T4 台状平場



高さ約2mの高台上に約30m×5mの平場を構築、約1m×1mの礫み2箇所(西から)



平場西端に4段の階段状遺構(南から)



径10~20cm大の礫群集中箇所、径1m以上の巨石(南東から)



造成された台状平場(東から)



台状平場から造船所を望む(西から)

今浦波戸防波堤(安政二年(1855)築造。昭和前期頃改築)

◎以上の遺構に加えて、この場所からは造船所と向かいの鶴江台、三見方面と島々を一望でき、造船所と海を監視するには絶好の位置にあります。

史跡及び世界遺産構成資産の範囲

